

スクールカウンセラーの発達支援に関する実証的研究 ～スクールカウンセリングセルフ・アセスメントシートの作成の試み～

The Evidence Based Study on Developmental Support by School Counselor :
Creation of School Counseling Self Assessment Sheet

千原美重子*

Mieko CHIHARA

要旨

本研究の目的は、スクールカウンセリングの標準的なプログラムを提案することである。さらに、スクールカウンセリング・セルフアセスメントシート（自己評価票）を作ることを目指した。スクールカウンセリングの課題、活動内容や、効果的な活動から質問紙を作成し、因子分析をした結果、カウンセリング・コーディネーション、コンサルテーション、緊急支援、心理予防教育、研修、自己評価、倫理、グループ対応の8因子を抽出した。因子得点をレーダーチャートに描くことで、個々のカウンセラーの活動を自分で可視化することができた。今後もさらに多くのデータを用いて検証する必要がある。

キーワード：スクールカウンセリング・セルフアセスメントシート（SCSAS）、8因子構造、プロフィール

研究の概要

今までスクールカウンセラーの発達支援に関する研究をしてきた結果についてまず概要を述べる。

平成7年度は、教育現場ではいじめ、不登校、暴力行為など問題行動が大きくクローズアップされ、震災や犯罪被害者の心のケアの必要性が求められた年である。こうした経緯の中で、学校臨床心理士（スクールカウンセラー：以降SCと略す）の公立の教育現場での調査活用研究事業が始まった。SCの配置は本年度19年間、継続してきた。この背景には、全国学校臨床心理士連絡協議会の支援など、多くの機関、人々の支援の賜物である。

平成23年度はいじめによる自死の事件が多発し、再び緊急支援の要請がなされ、SCのありよ

うが検討される事態となった。筆者は、平成25年度後期の教育心理学の授業で「SCについて相談したことがあるか」とのアンケートに「はい」との回答は、10.4%であった。1割の人が利用するなど、教育現場ではかなりSCの存在が馴染んできたことを示している。しかし、現実のSCが何をやる人かということについてあまり理解していないように感じている。「SCの具体的なイメージについて教えて下さい」というアンケートには、よくわからない、先生がどうしようもなくなったら送られるところ、相談員、悩みを聞いてくれる優しい女性や、無回答のものもあった。また、SCに将来なりたいという職業意識がある学生も、一般に具体的なイメージが持てない状況のようである。

また、待遇面でも、SCは単年度雇用であり、不安定な就労の現場で働いている現実を知らない学生が多い。また、SCが教員の免許を必要としていないという現実も学生は知らない。「先生といわれているのだから、教員ではないの?」という驚きの声ほとんどである。もうそろそろ具体的なイメージが形成されてもいいころではないかと思われる。

筆者は、今まで、スクールカウンセリングのスタンダードなプログラムを提案することを研究してきた。これはマニュアルではなく、大まかな地図を示すものである。筆者のスクールカウンセリングの課題、SCの実際の活動内容、学校が評価する効果的な活動などの過去の調査研究からスクールカウンセリングに関してカテゴリー化し、8つの基本的要素に集約した。それに添って質問調査票を作成してきた。スクールカウンセリングのスタンダードなプログラムを構築するために、SCによる質問調査票の回答結果を因子分析し、その結果、8つの因子を抽出した。それらは、カウンセリング・コーディネーション、コンサルテーション、緊急支援、心理予防教育、研修、自己評価、倫理、グループ対応の因子である。この結果は、スクールカウンセラーは多くの機能を持ち、総合的心理臨床家である(嘉嶋、2011)ことを示唆するものである。今後、さらに因子得点をレーダーチャートに図示することで自己の活動を可視化する方法を試みている。さらに精査し、スタンダードなモデルを構築し、スクールカウンセリングが教育の不可欠な一部とし確認されるようなプログラムの研究の方向性を提案したものである。すなわち、SCは、8つの因子を学校で担当する心理臨床の専門家であるという認識を高める必要がある。

また、一方でSC自身も、学校の中で自己のアイデンティティを捉えられず、SCを辞める人もいる。SC自身もSCの総合的心理臨床家としての深さと広さを理解する研究が必要である。

こうした意図を現実的に深めるために可視的なアセスメントシートが必要であると考え、SCのセルフアセスメントシート(以下SCSASと略す)を開発してきた。今まで8つの因子を抽出し、因子に命名をしてきた。この見直しの中で第6因子の自己評価を自己研鑽と命名しなおした。

レーダーチャートの中に各因子得点を記録し、アセスメントシートに描き、個々のSCのアセスメントを検討した。全体のマップの中で自己の活動を可視的に見ることは非常に参考になり、試験的ではあるが、SC活動のアセスメントシートとして、活用できるのではないかと感じている。今後さらに検討していく予定である。

以下、本研究に関して、はじめに、問題と目的、方法、結果と考察について順次、述べる。

I はじめに

筆者は平成8年度からSCとして、小・中・高等学校に派遣されてきた。今年でSCを初めて18年になるが、その間、多くの児童・生徒・保護者・教師・教育委員会・関係諸機関の方々に出会い、心理臨床の転換を求められた気がする。その間、保護者支援員として学校現場に派遣され、SCと協働して学校全体を俯瞰しながら活動する機会を得たことは、非常によい経験となった。SCは児童生徒の発達支援者の専門家としての位置づけであるが、同時に支援する（育む）ことを通して、Erikson, E.H. (1977) の提唱した成人中期における人格の活力を付与された思いである。育てるという行為の中で育てられていたと確信している。しかし、SC活動は地図なき道を歩むという感じがしている。SCは、クライアントである児童生徒や、教師、保護者と出会い、ともに十分に苦しみ、困惑し、危機の中にあって、初めてクライアントの思いを共感できるものである（村瀬、2008）。SC導入の際に、SCのマニュアルをあえて作成されなかったのは賢察であると感じている。イージーなマニュアル作りは危険である。心理臨床にとっては、とことんクライアントに添うことが基本である。河合は、臨床心理学シリーズの巻頭言において、「面接場面でクライアントと出会うときは、すべての理論を捨てて一人の人間として出会うこと」（2006）を強調している。

念願かなってSCをする修了生は多い。大学院で学校臨床心理学を学んでいても、その膨大なフィールドで迷子のような思いで途方に暮れる場合があるように感じている。

中堅のSCへのインタビューでも、「まず、授業参観をして、コンサルテーションをし、ケース会議というように固定してきた。果たしてこれで良いのか」という言葉が聞かれる。さらに、新任校で管理職に挨拶をすると、「勝手にやってください、自由にして下さい、好きにやってください」と言われ、どうしたものかという声が多く聞かれる（千原、2011）。

SCが出会うケースは、多くは、まだどこにもつながっていない児童生徒である。様々な状態のクライアントがある。どのようなクライアントでも対応することが求められる野戦病院のようなものである。

スクールカウンセリングは、臨床心理学の知見を学んでいればできると考えられているが、そろそろ独自のプログラムを立ち上げ、その独自性と有用性をきちんと明示することが必要な時期であると考えているSCは多いと思われる。

II. 問題と目的

SCは、学校というコミュニティに参画して心理臨床活動を行う場合、配置された学校のニーズに応じて、臨床心理面接、臨床心理査定、臨床心理地域援助を行い、さらに臨床心理研究をし、学校コミュニティにとって最も適した、必要性の高い活動を行うことが求められる。SCは、実践者であると同時に研究者である。苦勞して体験を積みあげねばならない。

SCは学校を一つのクライアントとしてみるのが重要である。SCは心理臨床家としての専門性と外部性を大切にすることは重要であるが、教育現場に立った場合は、学校教育の歴史と潮流を理解し、教職員と協働していく姿勢が求められる。すなわち、教育という土俵に上った時は、教

師の専門性と枠組みを尊重し、理解するとともに、SCとして期待されている役割を模索すべきである。SC活動は心理主義に陥るのではなく、脳科学も含めた生物としての人間の理解と、社会の中で生きる人間理解が必要であり、研修を常にしなければ専門家として対応していけないと痛感している。

したがって個々の事例では、当該生徒の医療的な観点も含んだ生育歴を聴き取りながら性格特性を見立て、主訴を理解するというミクロ的な立場と、当該児童生徒の背景に家族やその地域に生まれ育った地域文化と学校を見立てるマクロ的な立場が重要かつ不可欠である（千原、2011b）。

SCは、学校という土俵で創意工夫と臨機応変な対応が求められる。SCが導入されるまでは、心理的支援はクライアントとの1対1の関係を中心とした面接室の面接が中心に考えられていた（村瀬、2008）。そういう意味で、SCに求められる支援の内容は、心理臨床のパラダイムを転換させるものであった。まず第一に、今まで教師によって占められていた学校という他領域に入り、その文化や精神風土になじむこと、次に、個々の児童生徒を見ながら、家族への援助、学校という組織体や学校をめぐるコミュニティへの援助が大切である。さらに、時間や場所を特定して相談室内で予定に添って事を運ぶのではなく、その日、その時に応じて、柔軟な対応や、学校での危機介入や学校というシステムの中での情報の流れの理解など今まで求められなかった能力が求められるようになってきた。

スクールカウンセリングの先進国であるアメリカSC協会カウンセリングプログラムのナショナルスタンダードは一つの指針となるものである。アメリカのSC協会は1952に設立され、1990年にカウンセリングプログラムのスタンダードを発表した。このスタンダードは、SCの歴史、研究、モデルや、数千のSCから提案された情報を参照して作られたものである。その主要な成分は、カウンセリング、コンサルテーション、コラボレーション、ケースマネジメント、ガイダンスカリキュラム、プログラム評価である。このプログラムがもたらす利益は大きく、教育プログラムの不可欠な一部であるとしている（Campbell, C.Aら、2000）。アメリカと日本ではSCのあり方が異なっている点が多い。アメリカのSCは、認定専門職教育職、フルタイム、内部性をもつものである。日本の場合は、教育者というより心理臨床家、外部性をもつのが特徴である。また、アメリカの場合は、スクールサイコロジストがおり、心理臨床の専門家として、心理検査や、個別教育計画作成委員会をリードする。アメリカでは、専門職が細分割されている感がある。日本の場合は、SCは総合臨床心理士と指摘されており、アメリカのスクールカウンセラーの部分とスクールサイコロジストを一部兼ね合わせて活動していると思われる。日本のSCは、独自の活動プログラムを有していると想定できる。

本研究の目的は、因子構造によるスクールカウンセリングプログラムのスタンダードの研究からSCSASを作成し、自らそれに基づき、SCの活動の特徴を理解するとともに、今後の可能性のある活動を示唆することである。

Ⅲ. 研究方法

質問調査票は、今までに作成した質問用紙を使用した。SCのスタンダードな構造に関する調

査期間は、平成23年4月から25年7月で、対象者は84名であった。今回研究したSCのセルフアセスメントシートの作成のための研究協力者は、10人（男性SC 3人、女性SC 7人）であった。SC歴は、平均して7.6年で、1年から17年まで個人差がある。

IV. 結果と考察

1. SCのスタンダードな因子の再検討

抽出された8因子の命名は今まで、①カウンセリング、②コンサルテーション、③緊急支援、④心理予防教育、⑤研修、⑥自己評価、⑦倫理、⑧グループ対応としていた。内容を精査した結果、⑥自己評価には、自己研鑽、学校文化への配慮、面接記録の保存、SVを受ける、ケースの経過観察、SC活動の準備や広報活動に留意するという項目が入っており、自己研鑽の因子とした方がふさわしいと考えた。

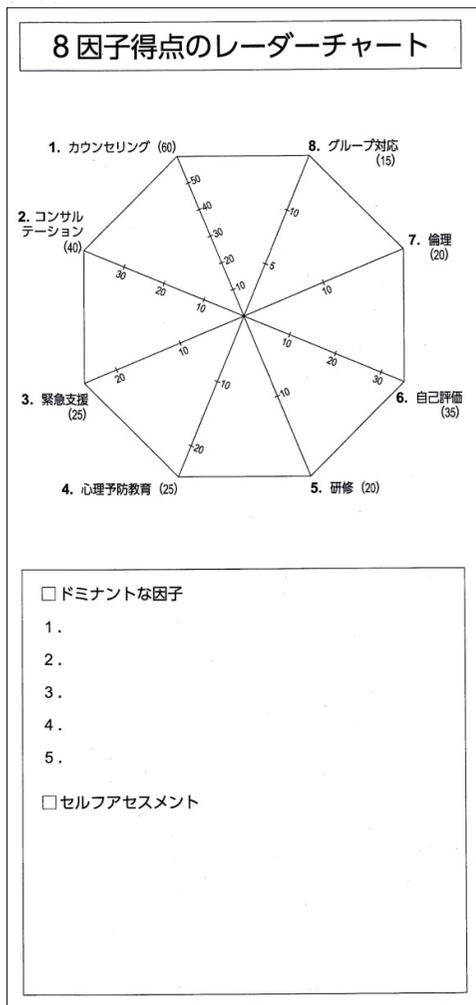


図1 SCSASの結果の表記欄

2. SCSASの表示の方法（プロフィール）

（図I、図2参照）

図Iは、SCSASに添付されている結果を示す図である。上部にレーダーチャート図を示し、次にドミナントな因子を記入する箇所があり、一番下に全体をまとめた結果が記入できる個所が設けられている。図2は具体的な事例の結果の例示である。

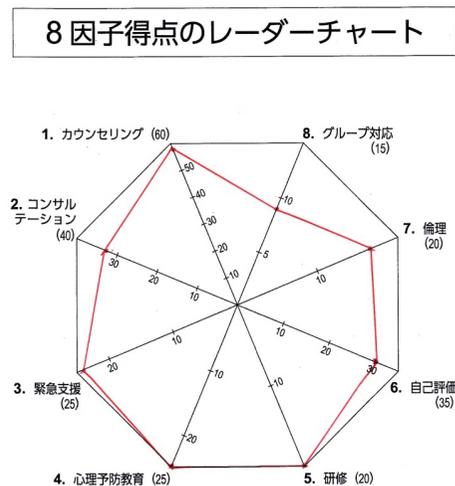


図2 事例のプロフィール

3. SCSASの結果の分析

表1は事例ごとの因子得点をまとめたものである(表1参照)。得点は粗点ではなく、パーセントに置き換えたものである。このうち、今回は3事例についてのみ考察する。

表1 SCSASの8因子の得点

項目	事例1	事例2	事例3	事例4	事例5	事例6	事例7	事例8	事例9	事例10
1. カウンセリング	0.83	0.95	0.9	0.75	0.85	0.8	0.9	0.88	0.58	0.58
2. コンサルテーション	0.28	0.85	0.48	0.48	0.43	0.55	0.68	0.48	0.25	0.3
3. 緊急支援	0.01	1	1	0.72	0.88	0.88	0.6	0.92	0.24	0.2
4. 心理予防教育	0.02	1	0.84	0.64	0.8	1	1	0.6	0.4	0.28
5. 研修	1	1	0.75	0.75	0.7	0.85	0.85	0.85	0.95	0.75
6. 自己研鑽	0.77	0.69	0.91	0.49	0.74	0.91	1	0.77	0.66	0.48
7. 倫理	0.2	0.9	0.9	0.45	0.9	0.65	0.9	0.85	0.75	0.65
8. グループ対応	0	0.33	0.4	0.4	0.07	0.2	0	0	0.13	0.2
SC歴(年)	2	17	6	16	18	4	1	10	1	1

1から8の得点は(%)

4. プロフィールの分析

図3は事例1のプロフィールである。SCになって2年目であり、ドミナントな因子は、研修、カウンセリング、自己研鑽である。研修を受けることに励んでおり、自己研鑽を積むことに意欲的である。SCの初心者として、もっとも基本的なことを大切にしており、真摯な態度が見受けられる。その他の活動としてはカウンセリングを中心にしたSC活動であることが分かる。カウンセリングを中心とした学校との関わりは教育相談コーディネーターがケース中心に考えているのかもしれない。このプロフィールは学校のニーズをも反映するものである。今後、研修等を重ねていき、コンサルテーション、心理予防教育などもニーズがあれば対応することも考えられる(図3参照)。

図4は事例2のプロフィールである。SC歴17年で、幅広い活動をしている様子が見える。SCを長くしていても研修を大事にしている姿勢が見える。ドミナントな因子は、緊急支援、心理予防教育、研修、カウンセリング、コンサルテーション、倫理である。勤務している学校が何らかの緊急支援的な事項を抱えており、心理予防教育やコンサルテーションのニーズが高いのか、かつての学校でこのようなニーズがあり、SC活動の中心に意識化されているのがうかがえる。今後、生徒会、保護者会などグループ対応などのニーズがあれば活動の提案も検討することも可能である。

図5は事例3のプロフィールである。SC歴6年で、ドミナントな因子は緊急支援、自己研鑽、カウンセリング、倫理である。SCを経験し、自己研鑽を積み、中堅的な存在になってきている。緊急支援を度々経験してきたと思われる。SCコーディネーターも、このSCに対して安心してカウンセリングを任せられる存在であることが推察できる。今後、コンサルテーションという教師とのつながり方が生まれてくるのではないかと推察する。

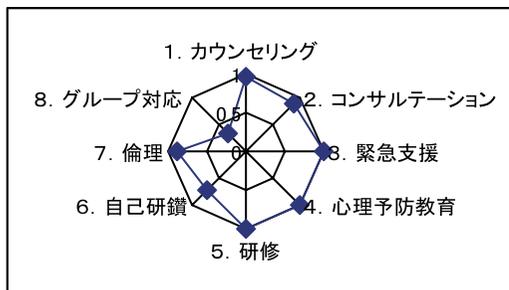


図3 事例1のプロフィール

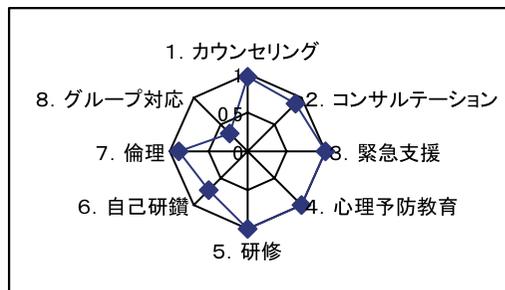


図4 事例2のプロフィール

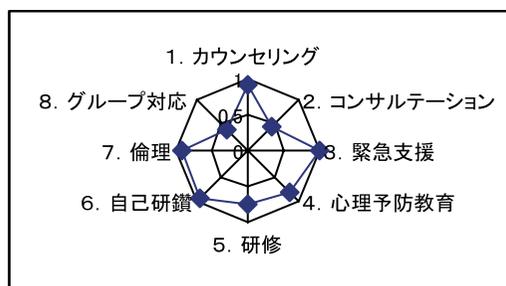


図5 事例3のプロフィール

今回は3事例について、SCSASの結果を基にSCの活動を見てみたが、かなり興味のある結果になったように思われる。今後さらにSCSASについて多くの事例を検討し、実際にSC自身のセルフアセスメントとして機能できるかどうかをさらに検討していく必要がある。

V まとめと今後の課題

スクールカウンセリングの日本におけるスタンダードプログラムとして、カウンセリング・コーディネーション、緊急支援、心理予防教育、研修、自己研鑽、倫理、グループ対応という結果となった。8つのスタンダードプログラムを概観してみて、スクールカウンセリングは、やはり相当な幅をもつものであり、多くの内容を内包していることに気づかされる。まさしく、総合的心理臨床家ということがふさわしいことに再確認させられ、SCとしてさらに自己の活動を再検討する必要性を痛感している。そのために、個人ごとに因子得点をレーダーチャートに図示し、自己評価できるように作成してきた。SCSASはSC個人を評価するものではない。SCが勤務している学校のニーズや文化を反映するものであり、SC個人と環境である学校、地域社会との相互作用を示すものである。SCの大枠を把握したうえで、SCにとってどのような可能性、どのような活動がそこにあるのかを見て、自らが自己開発をするときの一つのツールになるのではないかと考えている。

今後の課題として、さらに多くの方々にご協力をいただき、精査を続け、スクールカウンセリングのスタンダードプログラムを研究し、SCSASを多方面で活用し、実際のスクールカウンセリングにとって有益な視座を提供することを目指していきたい。

〈付記〉関西心理学会第125回大会で発表したものである。なお、本研究は奈良大学研究助成を得て行ったものである。また、研究に協力いただいた多くの皆様に心から感謝申し上げます。

文献

- Campbell,C.A.&Dakir,C.A.：(2000) 中野良顕訳 スクールカウンセリングスタンダードーアメリカのスクールカウンセリングプログラムの国家基準 (2000) 図書文化社
- 千原美重子 (1999) :「スクールカウンセラー活用調査研究委託」事業の5年目の課題 華頂短期大学研究紀要、44、93-103
- 千原美重子 (2006) :学校教育における心の問題への対応 (I) ～学校臨床心理士の活動に関する考察～ 奈良大学総合研究所所報、14、19-28
- 千原美重子 (2007) :学校教育における心の問題への対応 (II) ～学校臨床心理士の活動に対する学校における課題意識の分析～ 奈良大学総合研究所所報、15、49-57
- 千原美重子 (2008) :学校教育における心の問題への対応 (III) ～学校臨床心理士の活動に対する学校における効果的活動の分析～ 奈良大学総合研究所所報 16 29-39
- 千原美重子 (2010) :学校臨床心理士の発達支援に関する研究～活動内容、連携、緊急支援についての分析～ 奈良大学紀要 38 127-136
- 千原美重子 (2011 a) :スクールカウンセリングの構造に関するスタンダード作成の試み (I) 奈良大学研究紀要 39 37-46
- 千原美重子 (2011 b) :地域文化とスクールカウンセリング 子どもの心と学校臨床 遠見書房 5 11-19
- Erikson,E.H. (1977) 仁科弥生訳 幼児期と社会 みすず書房
- 学校臨床心理士ワーキンググループ：(1999) 第10回学校臨床心理士担当理事・コーディネーター全国連絡会議資料
- 嘉嶋領子 (2011) スクールカウンセラーの訓練とスーパーヴィジョン 村山正治・森岡正芳編著 スクールカウンセリング経験知・実践知とローカリティ 63-67
- 村瀬嘉代子 (2008) :スクールカウンセラーの課題 村山正治編 臨床心理士によるスクールカウンセリングの実際 至文堂 135-138
- 村山正治 (2008) :臨床心理士によるスクールカウンセリングの実際 至文堂
- 村山正治・森岡正芳 (2011) :スクールカウンセリング 経験知・実践知とローカリティ 金剛出版
- 大塚義孝, 岡堂哲雄, 東山紘久, 下山晴彦監修 倉光修編 (2004) :学校臨床心理学 臨床心理学全書12 誠信書房

Summary

The objective of the present study was to propose a standard program for school counseling. We aimed to create School Counseling Self Assessment Sheet (SCSAS). We categorized school counseling based on past studies on topics such as issues in school counseling, actual contents of activities, and effective activities at schools, and identified eight basic elements. We administered the questionnaire to school counselors and performed factor analysis for a total of 70 responses. A total of eight factors were identified as follows: counseling coordination, consultation, emergency support, psychological and preventive education, training, self-assessment, ethics, and handling of groups. These results indicate that school counselors have many functions and that they can be considered general clinical psychologists. We were also able to visualize the activities of individual counselors by creating radar charts of factor scores. Further research is necessary for confirming the need for school counseling in education

key words: School Counseling, Self Assessment Sheet, Structure of 8 factors Profile